

原体験における身体に関わりに関する研究

A Study on the Physical Relations in the Proto-experience

新 保 淳

Atsushi SHIMBO

（平成12年10月10日受理）

Abstract

Japanese education has taken knowledge seriously. The need of the natural experience is said as a reflection to it. It is said that a proto-experience influences a person's idea even during the experience.

This thesis is reexamined about the proto-experience and is explained about the physical part in the idea formation. And this thesis is examined about the influence which physical control exerts on the idea.

Our recognition isn't concluded by each function of the five senses. These receptive vessels function by relating to the mutuality as a system. This system is the basis of our world recognition.

A proto-experience is the starting point to compose this system. A human being recognizes the world continuously by moving this proto-experience to the starting point. Each view of life is made by the way of the recognition of this environment world.

An individual idea is controlled intentionally if this proto-experience is restricted by the political power. We must recognize the danger that it has like this. Enough proto-experience is necessary so that education may form a human being better.

1. 緒言

昨今の「机上の学習への偏り」＝「知識偏重」に対するアンチテーゼとして取りざたされる事柄として、「自然体験」の必要性があげられる^{※1)}。そこでは、青少年の自立や心の発達のためには、自然体験や生活体験などの「体験」が重要であるとし、しかも単なる「自然体験」や「生活体験」だけではすませるのではなく、それらが後々に何らかの意味を持ったものになるような、いわば「原体験」であることが求められている^{※2)}。確かに、自然探索をするだけ、あるいは自らの生活に関わる体験を増やすだけでは、その個々人のその時の「体験」が、後に、彼らの自然認識や社会認識に対して、果たしてどのような意味・意義を保証するのかは、不透明なままであると思われる。

ここで言う、一つの体験が後々に意味を持つようになるという「原体験」は、様々な場面で使われる用語である。例えば「彼のあの行動は彼の原体験に基づく」とか「思考のルーツを彼

女の原体験に求める」というレベルのものから、「そのときどきの母親の行動こそが、子どもの原体験が『楽園』の旗の下に立つかそれとも『地獄』の印を帯びるかについて、決定的な影響を与えるからである」(マリーオ・ヤコービ、p. 8)というように、学問的分野でも散見される。また辞書における「原体験」の定義を見ても「人の思想形成に大きな影響を及ぼす幼少時の体験」(広辞苑第4版)とあり、人間がある体験をすることによって、その個人の後々の行動や思想までも規定することになる、重要な「体験」であることを示唆している。

このようなことを受けて、教育の分野では、山田(1992)、鈴木(1996)、森本(1998)らが原体験をキーワードにした調査・研究を行っている。そこでは、これまでの学校教育が、人間の五感の内でも「視聴覚」という、「生存という視点で見ると、アクセサリ-的感觉」(小林、p.54)だけを重視してきており、それ以外の人間に生得的に与えられた他の三感、すなわち触覚・嗅覚・味覚といった感覚機能を加え、かつ、それら全てを十全に使ってこそ「体験に裏打ちされた生きた知識が判断力、表現力、創造力を豊かにする」(小林、p.54)ものになると指摘している。そしてこうした体験を原体験と呼び、それに「生物やその他の自然物、あるいはそれらにより醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚をはじめとする五官(感)を用いて知覚したもので、その後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験のこと」(小林、p.54)という定義を与えている。

確かに、「彼のあの行動は、彼のこれこれの原体験に基づく」というように、一つの行動に対してある特定の原体験を抽出し、それに因果関係を決定論的に求めることは困難であることが予想される。そのため「五感を使った体験」という網羅的な条件設定を行うことで、後々には子ども達の「感性・意欲などの生きる力や概念形成の基盤」(小林、p.55)となるであろう、という認識に留まることは、現状では止むを得ないものであると思われる。

しかしながら、ある原体験という「基盤」が、どのような機序(メカニズム)をもって、後々の我々の「思想形成」にまで影響を及ぼすのかについて考えることは、原体験の持つ意義・意味、あるいはその必要性を再確認するうえで重要であると思われる。

本論文では、まず、原体験そのものについて今一度検討することによって、それを「基盤」として派生するであろうメカニズムを、「知覚」と「自己形成」の関係に求め、さらには思想形成における「身体」の役割を明らかにしたいと考える。そしてこれらのこのことから、「身体」を管理することが、思想形成を一定の方向に導きうる可能性を持つことについても、言及してみたいと考える。

2. 原体験の持つ意義

原体験とは何であり、またその意義は、どこにあるのであろうか。このことを検討する上で、いくつかの文章を検討材料として考察をすすめることにする。

まず山田の以下の文章から、原体験について探っていくこととする。

今まで視聴覚教育の成果があがってきたのは、触嗅味の原体験が十分になされていたためと思われます。人間は外界の情報の85%以上を視覚と聴覚の二つの感覚から得ているといわれています。このため視聴覚教育が重要視されたのは当然のことです。しかし、視聴覚教育が有効なのは、視聴覚教材の内容(素材)と学習の基礎となる体験とが結びついたときであり、学習の基礎となる体験が乏しい児童・生徒への視聴覚教育は考え直す必要があると思います。(山田、

1990、pp.343-344)

まず山田は、現代の子ども達が、実物にまさに自分自身の「身体」を通して「触れる」ことよりも、「視（見）る」ことや「聴（聞）く」ことで知識を得ているという現状認識から、これまでの視聴覚教育の成果は、子ども達が、自然と十二分に触れあうことで得た原体験があったからこそ教育効果があったのであり、これからのそうした原体験をベースとしない子ども達に対して、果たして従来のような視聴覚教育が効果をあげるかどうか疑問を投じている。

確かに「知識」は、現実世界が文字や絵あるいは図として記号化されることで、人間は蓄積することができるのであり、その伝達は視覚や聴覚によってなされる可言えよう。とするならば、その効率的な伝達方法である視聴覚を使うことは、文化の維持・伝達方法としては、妥当な方法選択である。しかしながら「知識偏重」の教育は、「触・嗅・味」という三感を含めない世界で成立するものであり、このことは環境世界と人間の五感の関係を希薄化させるものであることを、山田は示唆している。そしてまた、そのことへの危惧が、原体験の必要性の根拠として述べられている。

こうした危惧は、今日の科学技術の発展によってもたらされた「仮想現実」の世界においても、類似の問題として取り上げられる事柄である。例えば、荒俣は、今日訪れた「技術者の社会」（機械とソフトの特性を知りつくした者を頂点とする社会）を支えている世界認識が＜抽象化＞にあるとし、それによって、例えば「父母」という、ときには微笑させ、ときには涙ぐませるほどに重い一語をすべて単なる記号と化し、極力リアリティや身体性から引き離すことで、操作性や管理可能性を獲得してきたと述べている。さらには、こうした抽象化された世界は、リアルな原素材の還元力を弱める傾向を持つとして、以下のエピソードをあげている。

19世紀半ばのビクトリア期イギリスでは、室内のフラワーアレンジメントすなわち花瓶に花をいけることが大流行した。深窓の令嬢たちはこぞって切り花をいけるアートに熱中したのだが、そのかわり、花は葉と茎しかなくて水中にある生物だと信じこんでいた。植物が本来は根をもち大地に生えている事実を、彼女たちはほとんど知らなかったのだ。（荒俣、p.309）

このエピソードは、「視聴覚」において投影された、まさに「切り取られた現実」が認識の材料とされていることを提示するものであり、この「深窓の令嬢」の似姿を、我々は現代の原体験がない（あるいは少ない）子ども達の将来の姿にも投影することが可能であろう。

この視聴覚、なかでも視覚の優位性に対して、触覚（ここでは狭い意味での触覚ではなく、筋肉感覚や運動感覚も含んだ感覚＝体性感覚）の持つ意味について、中村は、以下のように述べている。まず、これまでの視覚優位は、実は「視覚の働きについて、他の感覚とくに触覚との協働によるものを、純粹の視覚、単なる視覚の働きととりちがえている」（中村、1979、p.106）ことと、もう一つは「諸感覚の統合がもっぱら求心的に視覚の側にだけ考えられていること」（中村、1979、p.108）にあるとしている。そして「もとはといえば触覚（体性感覚）が視覚を教育したのであるが、一たび教育された視覚はたちまち触覚（体性感覚）を導き、方向づけ、その関係が習慣化される」（中村、1979、p.131）のであり、基体的なものは体性感覚にあるとしている。例えば我々が空間を認知する場合、それは視覚によってなされているように思いがちであるが、この中村の指摘に従うならば、触覚（体性感覚）によって蓄積された体験なくし

て視覚の認識はありえず、もしそうした触覚（体性感覚）を用いた体験を経ていないとするならば、その現実の空間は、視覚に訴えかけてくる光刺激のみであると言えよう。そしてこのことは、山田が指摘する「今までの視聴覚教育の成果があがってきたのは、触嗅味の原体験が十分になされていたため」ということを裏付けるものであると考えられる。

以上のことより、原体験は基体的な感覚受容においてなされる体験に近いものがあると思われる。そして、そこでの原体験を始点として、後の事象あるいは事物認識を行っていると思予想されるのである。

次に、小林の以下の文章を検討材料としてみよう。

原体験は従来の教育の視点で見ると、教育的意図や方向性に欠けるとして評価されていなかったものである。（小林、p.54）

教育のもつ内実の一つとしてあげられることに、ある意図をもって人間に働きかけることによって社会的な価値を実現することがある。小林は原体験を教育に取り入れることを前提として議論を展開している関係から、例えば「原体験は360°の方向性をもったものであるので、原体験それ自体は教科教育的ではない」（小林、p.54）というように、原体験は、教育への直接的な有用性、すなわちある価値を実現するような、教育的意図や方向性を持ち合うものではないとしている。確かに原体験は、「戦争体験」や「冒険体験」といった、非日常的な「体験」から、ある個人の人格形成を説明するための根拠として使われることが多々あることから、一般的な原体験のイメージが、そうしたものに偏りがちであることは、確かである。しかしながら、原体験を始点とする「360°の方向性」ということにこそ重要な意味があるのではなかろうか。というのも、後に述べることになるが、我々の人間の多様性は、実はこの「360°の方向性」が保証され、それを担保として実現される可能性を持っていると考えるからである。またこうした視点からしても、原体験が「後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験のこと」（小林、p.54）であるという言説を覆すものではないと言えよう。

そこで、次にこの「後の事物・事象の認識に影響」というメカニズムについて言及してみることにする。

3. 原体験の自己展開性

前節でも述べたように、我々人間は、原体験を始点として、後の事象あるいは事物認識を行っていることが予想されたとしたが、このことに大きな関わりをもつと考えられることに、「記憶」がある。そこで、この記憶について、まず概観してみることにする。

記憶には、「記銘」という覚えこむ過程とそれを覚えておく「保持」過程と、これを再生する「想起」とよばれる三つの過程があると言われている（塚原、p.130）。

この内の「保持」について考えるうえで、例えばコンピュータという具体物を想像するならば、我々はあたかも何か、ハードディスクのような安定した物理的な脳の「組織」に、それまでの体験が蓄積されるように思いがちである。しかしながら「脳の構造物質は速いスピードで破壊され、再生産されている。これを代謝回転というが、代謝回転のスピードは、DNAを除いては二週間以上安定な物質はない」とされ「人間の終生におよぶ記憶を担いいるものは、その安定性において、個々の物質にはとても求むべくもなく、唯一の考えることができる構造は、神経

回路の結合部位であるシナプスの構造ということになる」(塚原、p.89)。

すなわち、例えばある原体験をしたと仮定しても、それは脳に物理的に保持されるのではなく、ある意味で非常に「弱さ」を持った形でしか保持されないのである。ここで異分野についての検討ではあるが、以下の金子の「弱い情報」についての考察は、上記の問題に対して参考となるであろう。

社会的な状況においても、経済的な局面においても、不都合だとおもわれていたこと、できないとおもわれていたこと、とるに足らないとおもわれていたこと、それ自体ではたいした意味がないといった<弱い情報>が自発的に自由に発信されるべきである。それがネットワークをかけめぐり、それにたいして誰かが解決法や提案を出したり、それに誘発されて新しい情報が次々に出てくるという「つながり」が形成される必要がある。そうしなければ、新しい展開は生まれない。(金子、1998、p.46)

ここで注目すべきは、「弱さ」があるが故に、「つながり」が形成されうることである。前述したように、原体験は、大きな衝撃をともなって脳に記憶の痕跡(エングラム)として「保持」されることが一般的なイメージであろう。またこうした視点から、原体験がその「後の事物・事象の認識に影響を及ぼす」ことの要因を、非日常的な体験が持つ「強さ」に求めがちである。しかしながら、一方で、そうしたもののだけを原体験として捉えることは、原体験の持つ一面性を、特化しすぎるように思われる。というのも、従来の「強さ」を基盤として原体験から導き出される「後の事物・事象の認識に影響を及ぼす」ということが、あまりにある個人の思想傾向を限定的な視点から見なし、その個人をステレオタイプ化して捉えるおそれがあるからであり、またそれによって、原体験のもつフレキシビリティを覆い隠す可能性をもつと考えられる。

これらのことを金子の「ヒエラルキー・ソリューション」と「コミュニティ・ソリューション」という考えかたを援用することで、さらに考察するならば以下のような様相が見えてくる。「ヒエラルキー・ソリューション」は「権限と強制力をもつ第三者が統制する」(金子、1999、p.160)ことで、ある問題の解決をしようとすることであり、「強い」原体験においては、「強さ」が後々の個人を「統制」していくという点で類似が見られる。一方「コミュニティ・ソリューション」とは、以下の「コモンズ」を想定することで、問題の解決を図ろうとする方法である(金子、1999、p.37)。

- ・人々が自発的に集まり、情報、技術、問題などを持ち寄る
- ・共有された情報が編集され、そのことでコミュニティの何かが変化し、新しい関係や意味が出現する
- ・持ち寄った情報や変化の経験が、蓄積され、共有資源となる
- ・具体的な成果が上がり、各自が果実を持ち帰る

このことから、たとえ「弱い」日常的な活動であったとしても、それらを「身体」という「コモンズ」に蓄積させることによって、新たな「つながり」を求めるネットワークが展開される可能性を秘めていることを、イメージすることができると考えられ、ここに原体験の持つ「自

己展開性」があると思われる。

佐々木は、「想起」について、以下のような考察を行っている。

ある種の情動状態において記憶したことを、同一の状態が再び喚起されるとき最もよく想起できる。またある状況下で記憶したことは、同じ物理的状況に置かれたときに初めて生き生きと思い出すことができる。いずれも記憶という現象が、ここに『貯蔵』され、出し入れされるものではなく、われわれの現在の活動全体（中略）と有機的にかかわって初めて十全に存在するものであることを示している。（佐々木、1992、p.248）

この佐々木の考察は、前述の「つながり」について、さらに説明を与えるものであると思われる。すなわち、連続的である認知システムの原点（スタート地点）である原体験が、「同一の情動状態」や「同じ物理的状況」という契機において、「想起」されるだけでなく、そこでの蓄積が、また新たな活動方向を求めて展開するのである。いわば「情報は（中略）やりとりを交わす過程の中ではじめて、情報に意味がつけられ、価値が発見され、新しい解釈（中略）が生まれてくる」（金子、1992、pp.122-123）のと同じように、原体験が「想起」される（あるいはそれが意識にのぼらないものであるとしても）に留まらずに、そこでの新たな体験を次なる活動へと発展させることになると考えられる。ここに常にネットワークを張ろうとするベクトルを持つ、原体験の意味あるいは意義があると考えられる。

さらに、こうした「原体験の自己展開性」という状況を、西垣の「動物とは本来、環境世界から整合的なアフォーダンスを受け取りながら、少しずつオートポイエティックに自己を形成し、成長していくもの」（西垣、pp.200-201）という記述に求めるとするならば、この「原体験の自己展開性」というメカニズムはどのように説明できるであろうか。以下、この西垣の記述を手がかりとすることによって、さらに考察を深めることとする。

4. 原体験と自己形成の関係

まず西垣が使用した、アフォーダンス理論とオートポイエシス理論について、概観することから始めることとしよう。

まず、アフォーダンス理論であるが、これは、ジェームス・ギブソンというアメリカの知覚心理学者によって、1960年代に完成されたものである。端的にこのアフォーダンスを述べるならば、それは「環境が動物に提供する『価値』のこと」であり「良いものであれ、悪いものであれ、環境が動物に与えるために備えているもの」（佐々木、1994、p.60）である。「床はそこに立つことを、あるいは歩くことをアフォードしている」のであり、「壁はあなたの姿や声を、外の世界から隠すことをアフォードしている」（佐々木、1994、p.62）のである。

さらに言うならば、アフォーダンスは、「刺激」ではなく「情報」であり、その「情報」を発見するためには「全身での経験が必要な場合もある」（佐々木、1994、p.66）ものなのである。こうしたアフォーダンス理論が成立するのは、我々が生きている環境世界の素材じたいの物理的性質がそれほど変化しないという前提があるからであり、「ヒトもふくめたすべての動物の身体は、アフォーダンス理論が説明するような方法で知覚・行動するように構成されている」（西垣、p.195）のである。

また五感と知覚との関係について、このアフォーダンス理論では、五感をそれぞれ個々の受

容器として捉えるのではなく、受容器全体が連携されることを前提とした、「知覚システム」として捉えられている。例えば、視覚を失った人が歩けるのは、「眼」という受容器以外のものをシステムとして総合的に活用することによって、歩くことを可能にしているのである。とするならば、我々がよりよく環境世界を生き抜こうとするならば、当然のごとく、まず我々を取り巻く環境からのアフォードを十二分に受け取る必要があることと、さらには、五感のシステム化をいかに成し遂げるかが、その必要条件であるとも言えるとともに、そのためには五感全体を通した体験（≡原体験）の必要性をも示唆するものと言えるであろう。

環境の中の情報は無限である。したがってそれを探索する知覚システムの動作も生涯変化しつづける。知覚システムは、動物がどのような環境と接触してきたかによってまったく個性的であり、情報の数に対応するように無限に分化しうる可能性をもっている。知識を「蓄える」のではなく、「身体」のふるまいをより複雑に、洗練されたものにしてゆくことが、発達することの意味である（佐々木、1994、p.81）。

という佐々木の言葉は、原体験を始点とし、そこを起点として複雑化、洗練化されてゆく知覚システムの流れを表現するものである。また、アフォードンスを受け取る基体としての身体が重要な意味を持つことを、再確認させるものであると言えよう。

次に、そうした「アフォードを受け取った」主体が、どのように自己形成するのであろうか。以下、オートポイエーシス理論について見ていくことにする。

オートポイエーシスという用語は、チリの神経生理学者ウンベルト・マトゥラーナとひと時の弟子であったフランシスコ・ヴァレラが発明したものであり、それはオート（自己）とポイエーシス（制作）というギリシア語から造語されたシステム理論である。この理論の特徴を河本は「みずから行為することによって作り出される多元的世界を形成する」（河本、p.143）ものであり、さらには「認知の側から行為を組み立てるのではなく、行為そのものの継続という点で機構を組み立てた」（河本、p.150）のが、オートポイエーシスであると述べている。

西垣は、オートポイエーシス理論の観点から、＜心＞は「自律的な閉じたネットワーク」であると述べ、「妄想とか猜疑とか強迫観念といったものは、まさに心が自己回帰的な閉じたネットワークだからこそ生まれる」のであり、「自分の創りだした先入観にとらわれて対象を解釈すれば、それは他の人の解釈とはかけ離れた、＜意味＞を帯び」さらには「その解釈がまた、新たなゆがんだ先入観を自己回帰的に創りだす」（西垣、pp.77-78）と述べている。ここにまさしく自己が自己を創りだす「自己制作（創出）」の循環プロセスが成立するのである。また、「オートポイエーシスが基本的な場面とする経験は、行為の継続がそのことによってみずからの境界を変え、自己そのものを繰り返し作り出し、それに応じて環境そのものを変えている場面である」（河本、p.129）という記述もまた、西垣の理解を補足するものである。

以上のことより、「原体験の自己展開性」とは、原体験を始点とし、環境世界から様々なアフォードを受け取りつつ、それがさらなる自己を創りだすことを繰り返すのであり、またそこにおける自己形成は、他者との「差異」によって、すなわち他者の目からするならば、それがその人の持つ「個性」であるとともに、一人の思想をもった人間が創出されていくメカニズムを持つと言えよう。

そして、再び原体験が何であるのかについて言及するならば、それは、連続的である認知シ

システムと自己形成の原点であり、かつ常にネットワークを張ろうとするベクトルを持ったものである、と考えられる。

5. 原体験における「360°の方向性」の持つ意義

原体験を自己形成の始点として考える場合、原体験の持つ「360°の方向性」という特性は、大きな意味を持つと考えられる。それは、身体に対する意図的な方向づけが、その人間の思想形成のプロセスを方向づける可能性を持つとも考えられるからである。

市野川（2000）は、歴史的に権力が生命を「奪い取る」ことから「産出する」ものへと移行してきていると述べているが、この権力による生命の「産出」が、我々の原体験へと及ぶとき、そこにどのような状況がもたらされるのであろうか。

以下、明治以降、日本に輸入された「衛生思想」を素材として、原体験の特性である「360°の方向性」への権力の規制について見ていくことにする。

日本の近代化と衛生システムの関係について、小野は以下のように述べている。

国家衛生論は、個人個人の健康のみならず、国民全体を衛生システムの中に組み込み、日本をして「清潔で、健康な」文明国に仕立てていく目論見であった。それは日本が19世紀の列強のせめぎ合いの中にあって、先進国への仲間入りをはたすための必要条件であった。病原菌のいないこと、清潔であることが、近代国家の条件であったのである。（小野、p.90）

この近代国家へ向けての衛生システムは、「人命を人間個人としてみるよりもむしろ、国家という有機的全体」（小野、p.93）としてどのように達成するかが課題であった。ここに、個々人の身体が、衛生国家を構築するための手段として、管理・統制されていったことが看取できる。

もともとこの明治における衛生システム構築の発端がコレラの流行にあっただけに、その対策は多岐にわたり、検疫制度、隔離病院、警察制度をふくめた衛生行政機構の整備がなされるとともに、公衆衛生学・予防医学の発展、細菌学の進歩と薬品の開発、大日本私立衛生会のような啓蒙機関、衛生組合のような町組織がつけられた（小野、p.64）。すなわち、衛生システム構築において必要とされる諸制度が、コレラという目に見えない細菌対策の必要性から、為政者サイドの「力」によって作り上げられていったのである。

ここに日本人の「清潔志向」の端緒があるともいえよう。というのも、こうして明治をスタートした衛生思想は、今日、異常な形で清潔を志向する人々を生み出しているからである。例えば、抗菌グッズに代表されるように、汚いものに触りたくないという「不潔大嫌い」人間は、日常品でさえも「抗菌」であることを望むのであるから、当然のごとく「不潔」なものを自分から積極的に遠ざけることになる。多くの日本人が「臭い」を嫌い、「感触」を求めず、「視聴覚」の心地よさのみに走るのも、まさに「無菌無臭の環境を『善』とする社会的信仰」（藤田、p.208）に裏打ちされているのであり、またこのことは、原体験の「360°の方向性」への権力の規制が導いた結果とも考えられよう。

さらに中村は、古来、哲学では、五官のうち、視覚と聴覚が上位に据えられ、臭覚や触覚は下位に位置づけられてきたとしつつ、特に近代においては、五官のうちで臭覚がことさらに貶められているという。これは、わが国が明治以降、文明化の過程で押し進めてきた近代的な原理にも結びつくものであり、その近代原理を「動物から人間を区別し、本能的ではなくて知性

的、官能的ではなくて理性的たろうとする立場、(中略)一口にいえば、自然的(原始的)ではなく文明的たとうとする立場」(中村、1999、p.26)であると述べている。

ここでの問題は、原体験の持つ「360°の方向性」が保証されないことにある。すなわち、衛生システムが生み出した清潔志向は、我々が自己形成をなすうえで必要条件と考えてきた原体験という始点に、管理・統制を加えるものであり、こうして身体に加えられた管理・統制は、後々の思想形成にもその影が及ぶことの一例であろう。

原体験のもつフレキシビリティを使って、身体という「コモンズ」に蓄積し、そこでの「つながり」(新たなネットワーク)を経ることで、自己を再構成していく。こうした一連の流れの出発点を統制することが、その後の個々人の思想形成に影響を及ぼす結果が、先に例としてあげた、衛生思想を起点とした、今日の「超衛生志向」に見て取れるのではないだろうか。

一方で、管理教育への批判が高まる中で、昨今の教育界を見るとき、そこに新たな視点の芽生えを感じさせるものがある。それは従来の教科学習との関連にみる総合学習の類型の一つである。

まず、従来の教科の学習指導に間接的に生かされていくところの下ごしらえ的土壌づくりとしての総合学習がある。つまり、意図する何かを直接的に指導するという構えを前面に押し出すことをしないで、ただ子どもに豊富な活動体験を積み重ねていく、そのことを第一義的なねらいとするような総合学習である。(中略)つまり、自然や社会への認識を深めていくというような指導意図は背後に退いている。(中略)子どもが何かを知的にわかろうとそれなりに追究のめあてをもって活動体験を展開していくものではないからである。(清水、p.244)

この総合学習の類型の一つは、原体験の持つフレキシビリティを生かそうとするものであり、小林、山田らの考え方に通ずるものであると思われる。教育における価値実現に向けてなされるのが教科学習であるとするならば、その基底となる部分を総合学習にたくすことは、これまで一連の自己形成のメカニズムを見る限り妥当なものであり、ここに原体験における「360°の方向性」の持つ意義があると思われる。

6. 結論

本論文では、まず、原体験そのものについて今一度検討することによって、それを「基盤」として派生するであろうメカニズムを、「知覚」と「自己形成」の関係に求め、さらには思想形成における「身体」の役割について明らかにしてきた。

まず原体験は、基体的な感覚受容(例えば、五感(官)と呼ばれているもの)においてなされるものであり、それを始点とする「360°の方向性」へと自己展開可能なフレキシビリティを持つことに、その特性があることを明らかにした。さらには、そのフレキシビリティを使い、システム化された知覚によって獲得された情報が、身体という「コモンズ」に蓄積され、そこでの「つながり」(新たなネットワーク)を経ることで、自己を構成していくというベクトルを持つとも考えられる。このことが、「原体験は、後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験のこと」であると言われる所以であると考えられた。

また、その「360°の方向性」が何らかの意図で統制されるとき、それによってその統制を支配する者の意図的展開を可能にする危険性も孕んでいると考えられる。そしてこれらのこのこ

とから、「身体」を管理することが、思想形成を一定の方向に導くうる可能性を持つことになると思われる。

最後に、五感の持つ今日的意義を改めて考えるとき、中村の以下の文章も参考になろう。

いまや、近代原理はもちろんのこと、文明にしたところで、人間の生存にとって唯一の絶対的な価値ではなくなった。それどころか、文明化の独走によって、あらゆる意味で人間にとって生存の根源である生命力が、著しく衰退し希薄になってきている。したがって、もしわれわれ人類が自己の根源的な生命力を取り戻し強化しようとするれば、どうしても、自然のにおいとそれを感じとる能力を、またそれらの持つ意味を新しく見なおす必要が出てくる。(中村、1999、pp.26-27)

註及び引用・参考文献

- 1) 平成10年版環境白書の第3章「ライフスタイルを変えていくために」において、自然とのふれあいを取り込む生活を送るための方策について、現代の青少年の体験の少なさ等の調査をもとに、詳細な考察がなされている。
- 2) 科学技術庁でも、科学技術振興調整費（科学技術会議の方針に沿って、各省庁、大学、民間等の研究能力を結集して 基礎研究等を総合的に推進するとともに、科学技術の総合的な振興にあたり、必要かつ重要な研究業務に係る総合的な調整を行うための経費）を使って、以下のような調査結果を発表している。
「次代の科学技術を担う青少年の創造性を育成するための方策のあり方に関する調査」（科学技術振興 調整費ニュース、第170号平成9年11月13日
<http://www.sta.go.jp/sonota/sonota/71118_1.html>
そこでも、青少年期に創造性を育成するための環境がどのようなものなのかを探るために、研究者・技術者が青少年期に自然科学系に興味を抱く構造を分析するための原体験に関する調査を行っている。
- 1) 荒俣宏 (1996)：VR 冒険記，ジャストシステム
- 2) 藤田紘一郎 (1999)：清潔はビョーキだ，朝日新聞社
- 3) 市野川容孝 (2000)：身体/生命，岩波書店，pp.21-22
- 4) マーリオ・ヤコービ (1988)：楽園願望，紀伊国屋書店，p.8
- 5) 金子郁容他 (1992)：ボランティアもうひとつの情報社会，岩波書店
- 6) 金子郁容他 (1998)：ボランティア経済の誕生，実業之日本社
- 7) 河本英夫 (2000)：オートポイエーシス2001，新曜社
- 8) 小林辰至，雨森良子，山田卓三 (1992)：理科学習の基盤としての原体験の教育的意義，日本理科教育学会研究紀要，第33巻2号，pp.53-58
- 9) 森本弘一，山本三恵子 (1998)：幼稚園教諭における原体験について，奈良教育大学教育研究所紀要；第34号，pp.25-34
- 10) 中村雄二郎 (1979)：共通感覚論一知の組みかえのために一，岩波書店
- 11) 中村雄二郎 (1999)：正念場一不易と流行の間で一，岩波書店
- 12) 西垣通 (1999)：こころの情報学，筑摩書房

- 13) 小野芳朗 (1997) : <清潔>の近代, 講談社
- 14) 佐々木正人 (1988) : 記憶とからだ, 伊藤正男・佐伯朕編, 認識し行動する脳, 東京大学出版会
- 15) 佐々木正人 (1994) : アフォーダンスー新しい認知の理論, 岩波書店
- 16) 清水毅四郎 (1989) : 合科・総合学習と生活科ー五感を通した認識の成立を一, 黎明書房
- 17) 鈴木誠 (1996) : 原体験を重視した高校生の自然観察の実践ー大学の附属演習林を利用するー, 生物教育, Vol.36, No.2, pp.122-131
- 18) 塚原仲晃 (1987) : 脳の可塑性と記憶, 紀伊国屋書店
- 19) 山田卓三 (1990) : ふるさとを感じるあそび事典ーしたいさせたい原体験300集ー, 農山漁村文化協会
- 20) 山田卓三 (1998) : からだを感じるあそび事典ー五感をひらく原体験100集ー, 農山漁村文化協会